

学会彙報

○ 十月二十二日(木) 八時五〇分より
本年度二回日の真宗基礎学特別講義が行われた。高史明先生をお迎えして「『敦
異抄との出会い』と題するご講演をいた
だいた。

○ 十月二十八日(水) 午後三時より、
尋源講堂において真宗学会大会が開催さ
れた。龍谷大学教授浅野教信先生からは
『『西方指南抄』管見』と題して、また
本学教授臼井元成先生からは「善導浄土
教の課題と本質的立場」と題して、そ
れぞれ講演いただいた。

○ 十一月六日(金) 午後五時より、修
士論文中間発表会が行われた。各ゼミか
らの発表者と題目は左記の通り。

「如来二種廻向の考察」

寺川ゼミ 松岡雅則

「行信一念論」

幡谷ゼミ 池浦裕哉

「真の仏弟子」

小野ゼミ 池田 真

○ 十二月二日(水) 午後三時より、卒
業論文中間発表会が行われた。各ゼミか
らの発表者と題目は左記の通り。

「自然法爾」

江上ゼミ 大場善幸

「証大涅槃の仏道」

幡谷ゼミ 平原晃宗

「親鸞の生死観——念仏者の往生——」

小野ゼミ 内田文雄

「真の仏弟子」

臼井ゼミ 児玉貴之

「人間成就の道——深信自身——」

神戸ゼミ 一条顕良

「パウロと親鸞」

安富ゼミ 旭 理恵

「真实信心の獲得——二種深信——」

延塚ゼミ 加藤彰教

○ 十二月九日(水) 午後二時半より、
尋源講堂において金子大榮先生十七回忌
法要が勤修された。金治勇先生より「金
子先生を偲んで」と題する記念講演をい
ただいた。

編集後記

『親鸞教学』第61号をお届けいたしま
す。本号も発刊が遅れましたことをお詫
び申し上げます。

佐賀枝夏先生の論稿は、近代の真宗
の展開において忘れ去られている未開拓
の一面に関してということ、特に編集
部からの依頼で書き下ろしていただいた
原稿です。

また久木幸男先生の原稿は今年度の臘
扇忌法要での、清沢満之の教育観に關す
る講演に加筆訂正していただいたもので

す。

編集部としては今後とも新しい企画を
準備しながら、『親鸞教学』の紙面を充
実していきたいと思っております。

「諸行無常」という言葉は、仏教の最
も定式化したテーゼとなっているし、ま
たことさらに仏教とことわらなくても、
誰もが知っている当たり前の常識でもあ
る。「諸行」の「行」の意味、「諸法」で
はなく「諸行」であることはなぜかとい
うことが、仏教教理学では重大な問題と
なるようである。しかしそのような言葉
の詮索以前に、誰もが現実として直面す
る事実が、なぜ釈尊の教えとして、まず
第一に説かれなければならないのか
ということの方が重要であろう。

「諸行無常」ということが覚者の教え
であることの意味は、単に私たちに「嚴
肅な気持ちになれ」というお説教ではな
くて、「私」という意識を離れて生きる
ことができる人間存在に、私有化でき
るものなど、どこにも何一つもないとい
う事実の指摘であるに違いない。したが
って「諸法無我」なのである。

このこともまた常一主宰の実体として

我はないという意味であるが、それが様々な物についての分析の結果として事象には実体として我はないというだけのことであるならば、諸現象に関する一つの解釈でしかない。しかしそのことが覺者の教えであるときには、すべてを私有化して生きている私たちの現実が逆に浮き彫りにされてくる。

仏教は人間を苦悩する存在として見据え、その苦悩の根源を人間存在そのものへの無知として教えている。現代、今までほとんど顧みられなかった宗教が注目されることになったが、その多くは現実の不幸を説明解釈していくことで不安を解消しようとするものに思われる。人工的な明さが支配する虚無の時代に、苦悩について正直に考えることは気はずかしいことかもしれないが、そこに私たちが「私」への執着から解き放たれる鍵があることを、仏教は教えているのである。

(文責・安藤)

1993年1月25日 印刷
1993年1月30日 発行

親鸞教学 第61号 定価 1,000 円
(本体 971円)

京都市北区小山上総町 22

編 集 大 谷 大 学 真 宗 学 会
発 行 親 鸞 教 学 編 集 部

発行人 小 野 蓮 明

大谷大学真宗学会 振替 京都 6-8225番

京都市中京区寺町通三条上ル

発 売 文 栄 堂 書 店
振替 京都 8-2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50

印 刷 中 村 印 刷 株 式 会 社
電 話 (313) — 0468番